

夜明の緑谷

アニメ知識のみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼い頃病院で診察を受けた。結果、無事に個性を持つていた。
だから僕は安心したんだ。ヒーローになる道は閉ざされていない
と。
だけど5歳が過ぎ、6歳が過ぎ、7歳も過ぎた。
周りはとつくな個性が発現している。発現していないのは僕だけ
だ。

大丈夫、大丈夫。僕はちゃんと個性を持つている。

8歳が過ぎ、9歳が過ぎた。

大丈夫、大丈夫。まだ大丈夫。

10歳が過ぎ、11歳が過ぎた。

大丈夫、大丈夫。

12歳が過ぎて小学校を卒業した。

大丈夫、大丈夫。…………ほんとうに？

そして中学校に入学した夜。寝る時、意識が途切れる瞬間に声がし
た。

「ああ、狩人様を見つけたのですね」

前編

目

次

1

前編

満開だった桜が散り新しい環境に人々が慣れ始めた4月のある日、折寺中学校3年生の教室は喧騒に包まれていた。コミュニケーションツールが発達しいつでもどこでも話せるようになつた現代でもこの時間の教室は騒がしいらしい。昨日帰つてから何があつたか、宿題をやつていないうらみせてほしい、そんな他愛もないことに花を咲かせている。そんなざわめきもある人物が教室に入つてきたことで中斷された。

中学3年生の平均身長を大きく超える背丈と痩せこけていると思われる程の少ない筋肉量、見る者にのっぽや長身？躯といった印象を与える少年だった。表情は暗く顔には常に影が差している。陰鬱そうな雰囲気をまとい話しかけづらい空氣のある彼は周囲から一定の距離を保たれている。

しかし、彼が避けられている最大の理由は臭いである。決して臭いわけではない。ただ彼からは人とは違う臭いがするのだ。なんとも形容しがたい独特な臭い、それが彼と周囲の人間は異なるものだと思われてしまつてゐるのだ。

彼が自分の席に座ると生徒たちはポツポツと話しを再開させすぐ
に元の喧騒が戻り始める。ざわめきを取り戻した教室で1人本を読
む少年。

オリエンテーションが中心に行われ授業が午前中で終わつたことで普段以上にテンションが高い折寺中学校3年生。その中でも一際やかましい集団がいた。

「やつぱすげーよ！ あの雄英を第一志望にするなんて！」

「しかもA判定なんだろ!?」
「受けつこう同然ジやーン！」
お前の強個性に加えて頭もいいとかもう

「つたりめーだろ俺はお前らモブとはちげーんだからよ!」



周囲からの称賛に口汚く罵るも満更ではなさそな顔をするのは爆豪勝己。話題の中心人物である。雄英とは日本屈指のヒーローを養成する高校で、トップヒーローになるための登竜門ともされる超難関校である。爆豪たちの中学校は平凡な所でそんな場所からトップヒーローが輩出されたとなればかなりの宿がつくのは間違いない。爆豪もそのことをヒーローになつた後の話題作りの1つにしようと画策している。ただその場合は彼がクソ煮込みだつたことが語られ武勇伝になるだろうが。

多くの人に囲まれ街に繰り出そうとする爆豪だったがふと足を止めてある人物に足を運ぶ。その先には緑谷出久がいた。

爆豪と緑谷は幼馴染だ。幼稚園から中学校まで同じところに通っている。しかしながらその仲は良好とは言い難い。爆豪が緑谷をいじめていたからだ。通常4歳頃に発現するとされる個性を緑谷は中学1年つまり13歳になつても発現しなかつたのである。病院で個性は持つていると診断されてしまつたが余りにも遅く、緑谷は周囲から無個性だといわれからかわっていた。爆豪もその1人であり散々な扱いをしていた。だがそれも終わりを迎えることとなる。

緑谷の個性が暴走し昏睡状態になつたのだ。

昏睡状態の緑谷が目覚めたのはこの4月。緑谷出久は丸2年眠つていた。

「おいデク」

「…どうしたのかつちゃん」

僅かな間を開け緑谷が顔を向ける。その表情に爆豪は胸に痛みを感じた。

「センコーはヒーロー科志望は俺だけだつて言つてたけどよ、お前は志望してないのかよ」

「当たり前だよ。僕なんかがヒーローになれるわけないじやん」「ツ…！ そうかよ」

顔の陰を一層濃くし薄く嗤う緑谷に爆豪は苛立し気に踵を返す。

緑谷が個性を暴走させた原因は過度のストレスに晒されたこととされた。中々個性が現れず周囲との違いに思い悩み、ストレスをため

込んできてしまつたことで暴走したのだと医師は診断した。過度のストレスが原因と知り周囲の人間は心当たりが一つあつた。いじめである。

特にいじめていた者たちは自分のせいかもしれないと思い悩んだ。自分たちの行いが人の人生を台無しにしてしまうのではないかと。その悩みは緑谷が目覚めることで変わった。目覚めたばかりの緑谷に謝罪に行き、直々に許しを得た彼らは心から安堵したのである。しかしここで一人だけ、今も後悔の念に苛まれている者がいる。それが爆豪勝己だ。

爆豪は幼馴染である緑谷の性格を知っている。快活でヒーローになると言つて憚らない少年だつた。いじめてもいじめても明るさを失わず、人のために心を碎くことのできる優しい少年。そんな少年が目覚めから大きく変わつてしまつた。

快活さは陰鬱なものに、気配りができていたものが内向的になつた。何よりヒーローに対する憧れが消えていた。ヒーローになる為に何冊もノートを取つていつたがそのノートは全て捨てられている。端から端までびつしり書き込まれたノートである。昔の彼なら「ヒーローになれるわけない」なんて言葉は絶対に言わなかつた。むしろ個性を得たから遮二無二努力しているだろう。

対して

悪態をつき教室を足早に去る爆豪とそれを追いかけるクラスメイト。

緑谷は弱くなつた。昔の彼はもういない。ならば弱い者を守るのは強い自分の役目だ。それが幼馴染を弱くしてしまつたせめてもの償いであるから。

爆豪の罪悪感という痛みは未だ消えない。

緑谷出久は一人で下校していた。思い起こすのは先ほどめつきり

暴言を吐かなくなつた幼馴染に言われたこと。自分がヒーローを目指しているか否か。

そんなもの考えるまでもない。

——僕にそんな資格はない

自分も人を助けようと努力した。だが全て失敗に終わった。助けられたはずの命は全て掌から零れ落ち、最後は手助を求める声に耳を塞ぎ聞かなかつたことにした。

そんな自分がヒーローだなんて。まったくばかげた話だ。自虐的に嗤う緑谷。彼が高架下に差し掛かつた時、ズルリと這いずる音がした。

「Mサイズの隠れ蓑」

瞬間緑谷のいた場所にヘドロが叩きつけられた。

「……あれ？」

ヘドロ、正確にはヘドロ状になつてゐる自身の手を叩きつけた張本人であるヴィランは手ごたえの無さに声を擧げる。

手をどかすとそこに人はいなかつた。辺りを見渡すと少し先に獲物がいた。

「へえ、今のを避けるんだ。これはあたりかな？」

ヴィランの個性は取り付き人質にするだけでなく、その者の個性を強制的に扱わせることができる。強い個性ならそれだけで自身の戦力向上になる上人質の救出も困難になる。ヴィランはついていると内心で笑みを浮かべる。

「今ちよつと人質が欲しくてさあ、オレを助けると思つて手伝つてくれないかなあ。大丈夫、苦しいのは一瞬だけだから。」

喜色を隠すことなくヴィランが緑谷に迫る。

「……ああ」

「お？ 手伝つてくれるのかい？ いやあ優しいねえ」

呟く緑谷にヴィランは優しく声をかける。相手は完全に委縮している。これであのヒーローから逃げることができる。

「本当に、ここもあそこも変わらない……」

「あ？ お前何言つて——」

1人ごちる緑谷にヴィランがない眉を顰める。

俯き顔が見えなかつた緑谷がゆつくり顔を上げる。

徐々に、徐々に、ゆつくりと。

何かを堪えるかのようだ。

——何か、何かが変だ

相手は唯のガキだ。そのはずだ。なのにこれは何だ。何だこの圧

力は。何だこの空気は。

自分は一体、何に怯えているのだ。

「どこもかしこも獣ばかりだ」

溶けた瞳がこちらを射抜く。

瞬間、全身が粟立つ。思考する前に目の前の人物は危険だと本能が訴えかけてくる。

そして臭いがする。普通は嗅ぐことはない臭い。これは血だ。これは獣だ。血と獣の臭いだ。

陰惨で醜悪な臭いだ。

「お、お前一体……！」

「獣は狩らなければ。僕は狩人なのだから……」

ゆらりと緑谷が一步近づく。ヴィランは二歩下がる。

ヴィランは完全に気圧されていた。本能が今すぐ逃げろと警鐘をこれでもかと鳴らしてくる。だが自分の理性がそれ以上に叫んでいる。

唯のガキにビビつてんじやねえと。

「ツ！ このガキが！ オレを舐めてんじやねーぞ！」

警鐘を無視して拳を振り上げる。その時マンホールが吹き飛んだ。

「……」

「なつなんだ！」

ド派手な音にお互いの注目がそちらに移る。マンホールの穴から現れたのは果たして。

「もう大丈夫だ少年。なぜかつて——」

その姿を見てヴィランは目を見張る。今度ばかりは理性も逃げろと言つてくる。

そうだ。自分はアレから逃げている最中だった。

「私が来た!!」

ヒーロー名オールマイト。名実ともにナンバーワンヒーローの登場である。

「クツソがあ!!」

「今度は逃がさんよ！ そこの少年！ ちょっとしやがんでいてね！」

遁走するヴィラン。対するオールマイトは拳を振り上げながら声をかける。

「S M A S H！」

拳が何もない空間を殴りつける。ただの空振り。だがオールマイトなら話は別だ。

空を切つた拳は衝撃波を生じさせる。突風を撒き散らしつつ進むそれは容易くヴィランに追いつき直撃する。

「がああああああああ!?」

衝撃波を受けヘドロ状だった体がバラバラになるヴィラン。死にはしないがしばらく行動不能になつた。

こうしてヘドロヴィランは御用となつた。



「H A H A H A H A ! いやあごめんね！ 慣れない街だからか少し

手間取つちゃたよ！ しかし君が無事でよかつた。怖かつただろうによく頑張ってくれた。ありがとう少年！」

「…いえ、こちらこそ助けていただきありがとうございました」

「うくん礼儀正しい！ 感動すら覚えるね！ お詫びとは言つたら何だがサインでも書くよ！」

「いえそれは結構です」

「ううん手厳しい！ これはまだまだ頑張らないと！」 HAHAA

H A ! ……いやあ結構シヨツクだねこれ……」

オールマイトはテレビと何一つ変わらなかつた。

力強く、情熱的で、何よりよく笑い、笑顔が眩しい。
だからこそ。

「……その代わりに1つお伺いしたいことが」

「おっ、何だい？ 私に答えられる事なら何でも聞いてくれ！」

「……では1つだけ」

「ああ！ どうぞ！」

「貴方は何故人を助けようとし続けるんですか」

「ん？ それはもちろん——」

「人の手は2つしか無くて、人の腕は長さが決まっている。だから、手を差し伸べられる範囲には限界があるんです」

「——それは、うん。そうだね」

「しかも手を差し伸べたからと言つて必ずしも助けられるわけじゃない」

「……」

「人間である限り人を助けられる数は決まってるんだ！ それはオーラマイトでも同じはずだ！ 平和の象徴に助けられなかつた人はいない！ そんなはずはない！ そんなことあつてはならない！ 助けられた命の裏には救えなかつた命があるはずなんだ、掌から零れ落ちた命が!!」

「現に貴方の笑顔は強がりの笑みだ！ 不安を押し殺すための強がりだ！」

「！ それは

冷静だつた緑谷が声を荒らげ始める。

自身の両手を見つめ悲痛な表情を浮かべている。

「だから貴方も経験してるはずなんだ。心折れて膝をついたことが。なのに、何で。どうしてまだ前を向いていられるんですか」

「……」

「絶望してるので、なんで……」

「少年、君は——ツ、ゴホツ！」

泣きそうになりながらオールマイトを見上げる緑谷に答えようと
するもせき込み言葉が中断される。

手には真っ赤な血が付いていた。それだけでなく体からは僅かに煙が立ち上っている。

もう時間が……！」

一
オールマイト?

……すまない少年。時間が無くてね、急いでいるんだ」

「いや謝るのはこちらだ。本当にすまなかつた。少年、君の名前は何と言つんだい？」

一：緑谷です。緑谷出久

「は」。重山を二

「H A H A H A H A !
相変わらず礼儀正しいね！
じゃあまた会お

う緑谷少年!

とい死に入るに足りないが、

聞きたいことは聞けなかつた。また会おうとオールマ

ていたが相手は正真正銘のトップヒーロー。もう会うことはないだろう。だがそれでいい。惨めな自分にはお似合いだ。

おおい聞かせ
絶叫は今日も目醒めぬいのであつた

[REDACTED]

ビルが立ち並ぶ街の中でも高い部類になる建物の屋上に飛来物が

ヒルが立ち並ぶ街の中でも高い部類になる建物の屋上に飛来物か着地した。大量の煙を噴き出すその正体、それはオールマイイトであつた。

しかし様子がおかしい。筋骨隆々の大男であるはずが二回りはしほんでいる。それどころか今現在も小さくなっている。

そして一際大量の煙を吐き出した後、煙が晴れるとオールマイトの姿はなかつた。代わりにいたのはオールマイトとは似ても似つかぬ

骸骨の様な男。背丈だけはあるがその体は骨と皮しかないのではと思わせる程病的に細い。サイズの合っていないシャツとズボンを着ている事も相まって更に小さく見える。

だがこの死にかけにしか見えない男こそがオールマイトその人であつた。過去の死闘により生死の境をさまよつた彼はこの姿、トルーフォームになるまでに弱体化しているのだ。

鉄柵に背を預け座り込み乱れた呼吸を整える。

彼の頭にあつたのは危うく一般人に秘密がバレそうになつたことではなくその一般人、緑谷出久のことであつた。

少年は確かに言つていた。自身の、ナンバーワンヒーローであるオールマイトが浮かべる笑顔は強がりであると、不安を隠すための笑みだと。その指摘は当たつている。

もう長い間ヒーローを続けていたことは一度も無かつた。オールマイトの笑顔は助けを求める人を安心させるための笑顔だと誰も疑つていなかつた。それを、見抜かれた。

「……彼も経験しているのだろうな」

誰かを救うことができなかつたことが。自身の無力感に苛まれたことが。だからこそ気づいたのだろう、私の笑顔の真実に。「あの歳で、か。いつたいどんな人生を歩んできたのやら。……いやだからこそ」

だからこそ彼がふさわしいのかかもしれない。

オールマイトは平和の象徴だ。だがそれも危うくなつていて。巨悪との戦いでボロボロになり、平和の象徴は崩れ去る一步手前にある。そう遠くない日に必ず来る。

だからこそ必要なのだ。次代の平和の象徴が。

物理的な強さならどうとでもなる。だから必要なのは力を正しく扱うための精神性。黄金のように煌めく精神をオールマイトは探しているのだ。

その候補にあの少年はなるかもしれない。救えなかつた痛みを知つていることは大きな力になる。

痛みを知り、それでもなお立ち向かい戦うことができるのであれ

ば。

「それを確かめる為にも、もう一度会って話してみよう」

幸い名前は知っている。歩いていたことからあの近辺にある学校の生徒だろう。周辺にある学校に片つ端から問い合わせたらいつか辿り着くはずだ。

それに彼の問い掛けに答えられていない。私の答えを聞かせるためにも一度会わなければならぬ。

「……ふう、落ち着いた。さて、何はともあれ先ずはこのヴィランを警察に届ける事が先決……」

ない。

ポケットにしまったはずの、ヘドロヴィランを詰めたペットボトルがない。

どのポケットにも、パンツの中にもない。
考えられるのはひとつ。跳躍した時に落としたのだ。跳んでる最中もトゥルーフォームになりかけていた。細くなりズボンのサイズが合わずぶかぶかになってしまいポケットから零れ落ちてしまったのだろう。

「ヽヽヽ！　なんて、無様っ！」

オールマイトが言つたと同時に遠くで爆発音がした。

目を向けると土煙が上がつていた。かすかにだが赤い光も見える為燃えている可能性もある。

土煙は跳躍の軌道上を少し離れたところにある。逃げ出したヴィランが暴れているのだ。

「S H I T !!」

ガンつと鉄柵を殴りつける。

「ツヽヽ！」

殴つた手に痛みが走る。オールマイトならば本来感じることのない痛み。

こんな些細なことで自分が弱くなつたことを痛感し歯噛みする。

「そんなことより速く向かわなければ！」

再度遠くで爆発音が鳴り響く。

オールマイトはそれを聞き急いで走り出した。